

Q: Why Renovation?
A: To Sustain the Sustainable.

再生建築の旗手に聞く 今、なぜリノベーションなのか?

中古物件を購入して、自分の好きなデザインやライフスタイルに合わせた間取りで再生する。リノベーションで好みの住まいをつくることは、出費の節約や地球環境への負担の軽減も実は結びつく。数々の集合住宅、公共建築の再生を手がけてきたリファイニング建築のリーダー、青木茂に話を聞いた。

写真：佐藤暢隆（ポートレート） 文：中島良平 編集：橋田光靖 (En Inc.)



青木 茂

建築家、博士（東京大学工学）
1948年、大分県出身。首都大学東京特任教授、青木茂建築工房主宰を兼任。2012年日本建築防災協会・耐震改修貢献者理事長賞を受賞、翌2013年同協会・耐震改修優秀建築賞を故黒川紀章が手がけた「浜松サウラ」（静岡県浜松市）の再生建築で受賞したほか、受賞歴多数。著書「長寿命建築へ」「住む人のための建てもの再生」「REFINING CITY × SMART CITY」など。



YS BLD. (自邸)

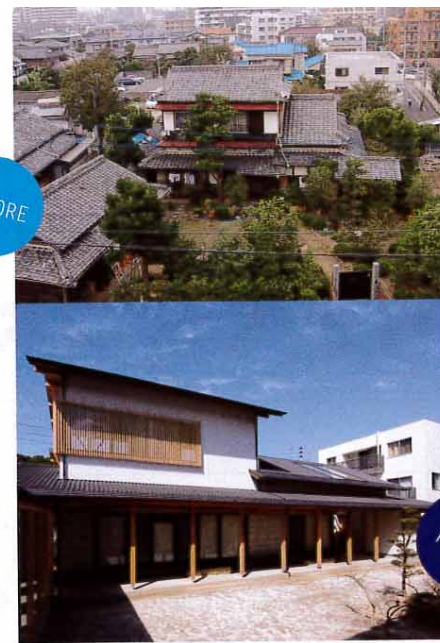
リファイニング建築を推進する青木は、自ら中古物件を購入し、オーナーとなることで、クライアントの気持ちを理解しようと試みた。そうして再生されたのがこの建物だ。メゾネット住宅を利用した通風、外断熱、屋上緑化などの環境的な試み、長寿命化を実現する構造体などにも着手している。

「私が社会に出た1970年代は、建築や都市計画を生物の『新陳代謝』になぞらえたメタボリズム運動の成熟期で、新築が当然のように行われていました。そしてバブルの時代へ突き進み、バブル期の後半から『スクラップ アンド ビルド』一辺倒ではおかしいのではないかという議論が行われ始めた。今でも当時の記憶は鮮明に残っています」と語る青木茂は、その時期にキャリアをスタートしたことで、自分がリファイニング建築に携わっていることは必然的に結びついているのではないかと感じている。「30年ほど前に初めてヨーロッパを旅行したときに、北イタリアのヴェローナで、カステルヴェッキオという城を訪れたことが大きなきっかけになりました。『ロミオとジュリエット』の舞台にもなった城なんです。現在は内部を改装して博物館として利用されているんです。既存の建築を10とすると、その空間に1か2の要素を挿入することで、こんなにエレガントな建築になるんだ、と体感しました」

スクラップ アンド ビルドの終焉。

大分県佐伯市（旧南海部郡鶴見町）の旧海軍基地を資料館として再生させたのが、青木のリファイニング建築第1作だ。竣工は1988年。やがてバブルが崩壊し、建築の仕事が大幅に減り始めた時代に自分が生き残るためには、デザイン論のみではなく技術論を極めた建築家になるべきだと直感した。

古い建物を壊して新しい建物を建てるのではなく、その構造体や材料を調査し、適切な補強と補修をすることで長寿命の建築に生まれ変わらせる。そして、竣工当時の古い形態の間取りを現代の生活様式に適合させ、水回りなども最新の設備に置き換える。補



T-cho

築100年の母屋を再生した計画。老朽化の進んだ躯体を補強し、昔ながらの間取りの悪しき使い勝手の改善を目指した。風が抜ける配置とするために、移築して90度回転する曳き家を実施。耐震性能を上げるために6枚のRC壁を用いるなど100年の建物の歴史を現代技術で支えることに成功した。

強などを施した改善箇所をすべて記録。現在の建築基準法をクリアして確認申請を改めて提出し、完成後に検査済証を取得することで法的に新築と同等となるまで徹底する。「手間がかかる仕事ではあるけど、これをきちんとすることで住む人の安全・安心が保障されますし、建築家の仕事としてきちんと設計料を得られます。ヨーロッパは建物が一掃して再建される環境ではないのに、建築家たちが生活しているでしょ。古い建物のリファイニング、リノベーションを行ううえで、そういう手間のかかることを徹底してやって、設計費が認知されると考えています」

お仕着せの建築に内装から“自分らしさ”を。

安全な住環境を確保することと同時に、自分の趣味に合ったデザイン、ライフスタイルに合わせた間取りを実現するのがリノベーションの大きな魅力だ。福岡県で再生を行ったT-choでの方法論は、もとある躯体を活用して新たな空間を生み出すリファイニング建築でありながら、マンションや戸建ての中古物件を購入してのリノベーションにも応用できる。「古い躯体を完全に残すことで、梁や柱の味わいが残る。お金で買えない歴史や時間というものが、この建物の空間には残っているのです。これは住む人にとって誇りになると思うんですよ。それを残しながら、今の生活様式に合わせた間取りにつくり替えました。例えば、趣味の部屋として使う広い部屋をつかってほしいとか、和室が必要だとか、奥様の部屋もつかってあげたいとか、生活に合わせたリクエストを受けながら伝統を残すことができました。オーナーさんにはとても感謝されました」



イブセ目黒鷹番

デザインと機能を考慮した内外装を施した築36年の集合住宅。60戸の1DKで構成されていたこの建物の、既存耐震壁に開口を設けることで2住戸を1住戸、3住戸を2住戸とし、計55戸に変更。現代のライフスタイルに合わせた間取りとデザインで、都会的な集合住宅として再生した。

実は誰もがリノベーターになれるんです。

スクラップ アンド ビルドで新築するのと比べ、リファイニング建築では廃材量が44%、CO₂の発生量も16%に過ぎない。地球環境に優しく、またローコスト化も実現できる。「建築のコストを内訳してみると、3割が躯体、3割が仕上げ、3割が設備で、もう1割が作業経費になります。だから、躯体の分を省略すると、3割安くなる。そう考えると、内装や設備などで妥協せず、通常の新築よりもお金をかけてこだわる気持ちも出てきますよね」

青木の建築論には、日本人がいかに豊かに暮らすか、そのためには時間をどうデザインするか、という考えが反映されている。「例えば、イタリア人の男性って経済的な収入に比べて豊かに暮らしているイメージがありますよね。美味しいものを食べたり、お洒落をして女性にモテたり、男の身としては理想的じゃないですか。日本では住宅ローンが生涯賃金のだいたい3分の1か4分の1ほどの負担となってしまうので、男性は平日に一生涯働いて、週末は自宅でごろごろする、みたいになってしまふ。ヨーロッパだと住環境にかかるお金が生涯収入の10分の1程度だと思うんですよ。だからリファイニングをすると、建築をデザインするのと合わせて、賃金のどのくらいが住宅に回るとかも含めたライフスタイルも設計できる。つまり、豊かで楽しい生活の実現と、ストックを生かすことに着目した住環境の選択とは結びついているのです」コスト削減、環境への配慮、自分らしい生活スタイルの実現。リノベは広い展望をもたらしてくれる。